

「光の小鳥」をつかまえるために

——JKUアニユアル・レポート復刻に際して——

国 吉 栄

はじめに

このたび立派に復刻されたJKU (The Kindergarten Union of Japan・日本幼稚園連盟) のアニユアル・レポート (年次報告書) 全書を手にして、保育史の資料を夢中になって読んでいた何年か前のことがなつかしく思い出された。

当時私は修士課程の学生で、保育を学ぶ傍ら保育史にも興味を抱き、その類のものを片端から読んでいたが、保育史の第一資料は必ずしも多くはなく、まして私も直接手にすることのできる資料は限られていた。それで

も、一つの疑問が次の疑問を生み、それが次の関心へと引き継がれ、興味のつきることはなかった。

私がJKUアニユアル・レポートを初めて手にしたのもその頃である。ようやく手にした数冊のレポートの頁は日に焼けて黄ばんでいた。探していたものを見出した喜びを抑えて、そっと開いた頁から目に飛び込んできた文字のなんと新鮮であったことか、今でもありありと思ひ起こすことができる。

そのアニユアル・レポートが、全巻揃って、今、私の前にある。手をつくしても、長い間目にすることができ

なかつたレポート。それを今、居ながらにして読むことができるのが信じられない気持である。

#### 未開拓資料JKUアニュアル・レポート

JKUは、幼稚園にかかわりを持つ在日外国人キリスト教婦人宣教師・保育者が集まって、一九〇六年（明治三十九年）に「幼い子どものための仕事を効果的に進めるため、在日外国人保育者が相互に話し合い、連携し合う」<sup>(註)</sup>ために結成したのである。その後、彼らの活動の一つの成果ともいえる日本人保育者による「基督教保育連盟」が結成されるに及んで、一九四〇年（昭和十五年）に正式に解散されるまで活動が続けられた。

今回復刻されたアニュアル・レポートは、彼らの保育を伝える実に多くの写真と真に、多彩な記事が掲載され、JKUおよび当時の保育状況を研究するうえで欠くことのできない資料である。ところが残念なことに、このアニュアル・レポートは、その存在こそ知られていたものの、内容が紹介されたことはほとんどなかったし、

実際にそれを読んだことのある人も研究者を含めてごく限られていた。それは、発行母体であるJKU自体についても、未解明の部分が多く残されているということでもある。

日本の保育の歴史においてキリスト教が果たした役割を考察する場合、一般に、婦人宣教師たちの活動が取り上げられる傾向が強い。にもかかわらず彼らの働き自体が十分に吟味されていないとすれば、その評価はいきおい、表面的にならざるを得ないであろう。これは、日本の保育の歴史においてキリスト教が果たした役割を理解する上での当面の障壁であると言わなければならぬ。

しかし、また一方では、「保育史におけるキリスト教」という点を考える時、宣教師たちの働きに重点を置きすぎることは、逆に、現実理解から離れてしまう危険もある。彼らの働きは、日本および日本人との具体的な関係があつてはじめて意味を持つのがあり、おそらく彼ら自身も、そのための努力を積み重ねてきたに違いないのである。例えば明治四年、未だキリスト教禁制下の横浜

に、三人のアメリカ人婦人宣教師によって小さな保育施設が始められた。ただこれだけであるなら、保育の黎明期の一つの出来事にすぎない。しかし、その施設のために募集広告を書いたのが中村正直であったという事実によって、保育史におけるその小さな施設の意味は、俄然大きくなるのである。中村正直（敬孫）は徳川幕府最後の公認の儒者で、明治期の代表的な知識人の一人であるが、明治八年、東京女子師範学校の初代摂理（校長）に任ぜられ、翌九年の附属幼稚園創設に深くかかわったことはよく知られている。そうであれば、日本で最初の幼稚園とされている国立の幼稚園の成立に、今まで考えられていた以上にキリスト教の影響があったのではないか、という推論が生まれる。これを立証していくことによって、キリスト教が日本の保育をつくる上で果たした役割の現実が浮かびあがってくるであろう。また、こうした視点抜きでは、「そういうこともあった」というだけに終わってしまうであろう。宣教師たちが果たした役割の意味を現実にも則して評価するためには、一つ一つの

ことからの意味をていねいに掘り下げることが是非とも必要である。

ともあれ、一般にキリスト教保育の源泉だと考えられている婦人宣教師の働き、それにしても彼らの働きが十分に検討されてきたとはいえない現実、そのことが、キリスト教が日本の保育に果たした役割に対する評価を通り一遍のものとして、薄めたりする一因となるとすれば、如何にも残念であり、また、保育史の全体像をゆがめることにもなる。この悪循環を断つためにも、この辺で彼らの働きと正面から取り組んでみる必要があるのではないか。今回、基督教保育連盟から復刻されたアンリアル・レポートは、そのための絶好の資料となる。未開拓の資料であるからぜひ大勢の方々々が検証に参入し、多彩な研究が進められることを期待したい。

#### 光の小鳥

日本の保育史にキリスト教が果たした役割を正しく位置づけるという大きな仕事は、今後の研究を待つことと

し、今回は、復刻版を読んで得た「小さな発見」を通して、私見の一端を述べさせていただくこととしたい。

何気なくアニュアル・レポートの解説文を読んでいた時のことである。その中の一文に、私はハッとさせられた。それは、小林恵子氏が女優長岡輝子さんの幼稚園時代の思い出を引用されたもので、次のように書かれてあった。「音楽家だったタッピング先生は、色々な曲を弾いて子供達を思い思いに走らせたり静かに歩かせたり眠らせたりした。お天気のいい日はクリスタルの棒を日光に反射させて部屋中をチラチラ光らせ、それを私達は『光りの鳥』と呼んでつかまえようとするのだが、そんな時、先生は必ずピアノのキーをたたいた<sup>(註2)</sup>」。私はこれを読んで大変驚いた。実は以前にこれと全く同じ保育の実践例を読んだことがあったからである。それが載っていたのは、九十年も前のアメリカの保育雑誌「Kindergarten Magazine」<sup>(註3)</sup>である。プリズムを使った「Light Bird」という名のこの保育例を、拙訳で紹介してみよう。

「子どもたちが床に車座になっているところに、プリズムで壁に七色の光のスポットを写し出してみました。子どもたちは息をひそめて光を見つめ、私たちが歌う小鳥の歌を聴いています。突然小鳥が飛び上がって、円陣のまん中の床にとまります。子どもたちが一斉にかけ寄って手を伸ばすと、ほら手の上に。また飛んで、子どもたちの頭や肩に。子どもたちは沸きに沸き、駆けまわったり、跳んだり、叫んだり。小鳥はまた高い壁にとまり、子どもたちの手は届きません。また床近くに降りてきた小鳥のあとを子どもたちがついていくと、小鳥はフッと消えてしまいい。子どもたちは息をのんでもとの位置に座りました」。――。

驚いたのがおわかりいただけただけであろうか。アメリカのこの実践は一八九六年（明治二十九年）に現場報告として出されたものであるのに対し、日本での実践は、ミセス・タッピングの盛岡時代のことであるから明治四十年代のものであるが、彼女が来日し、幼稚園を始めたのは、JKUレポートによれば一八九五年<sup>(註4)</sup>であるから、両

者はほぼ同時代の保育といつてよいだろう。アメリカの

実践例の保育者はミセス・ルバフ (Mrs. H. J. Lebeut)

という婦人である。この類似はどこから来たのであるう

か。私はミセス・タッピングが保育者としての訓練をど

こで受けたか未だ調べていないが、その点でミセス・ル

バフとのつながりがあるのだろうか。あるいは彼女はそ

の雑誌を読んだことがあったのだろうか。そうだとすれ

ば、ミセス・ルバフの保育に共鳴するものがあつたとい

うことであろう。あるいは、太平洋を隔てて、両者独自

の実践が行われたのだろうか。いずれにせよ、同じよう

な保育が、同じような時期に、アメリカと日本という離

れた地でなされたという事実は、楽しくもまた興味深

い。長岡さんの思い出のごとくに、ミセス・タッピング

のこの保育が日本の子どもの心に深い印象を残したよう

に、アメリカの保育もまた、アメリカの子どもの心に

に思い出を作ったことであろう。こんな小さな例ではあ

るが、そこに、アメリカの片田舎の小さな幼稚園と、盛

岡という日本の一地方に初めて開かれた幼稚園との連環

を確かに感じる事ができる。

### ミセス・ルバフの保育

ミセス・タッピングの保育を知る手がかりとして、ミセス・ルバフの保育をもう少し紹介してみよう。

彼女の幼稚園は、ロサンゼルスの東南およそ三十マイルほどにあるオレンジ・カウンティ、サンタアナの郊外にあつたらしい。現在はロサンゼルスの有産階級が住む豊かで美しい町になっているが、当時はまだ住居もまばらな新開地であり、彼女の幼稚園がオレンジ・カウンティにとつても初めての幼稚園であつた。しかし、一八七八年、八〇年と続いてサンフランシスコに二つ、八五年にはロサンゼルスに一つの幼稚園協会が発足しており、「幼稚園運動」という点からみれば、重要な地域の一つに位置していたといえる。

彼女の保育の記録には、織紙、刺紙、縫紙、図画法など、恩物の報告もあり、よく用いられている様子がうかがわれる。けれども、例えば刺紙では、できるだけ目を

疲れさせないように、太くはっきりした線で描いた最も単純な絵を用意する、織紙には50×60センチ大のアー  
ト紙を用いる（通常は10センチ四方の色紙が用いられて

いた）など、工夫がみられる。また、四人ずつのグループで一つのマットを織るなど、小さい紙を一人で扱うのではなく、大きな紙を使って共同で作業する方法を採っている。さらに、恩物を保育の実情に合わせて柔軟に変化させるだけでなく、恩物で用いたテーマを繰り返して各種の方法によって現表することも行われている。その一例が「虹づくり」である。それは、「カリフォルニア名物の虹をテーブルにレンズ豆を並べて作る。黒板にチョークで描く。カードに色鉛筆で描く。さらにはアー  
ト紙を細く切って鎖にしたもので部屋いっぱいにかかる虹を作り、机で足場を作って釘を打ち、それに虹をかけて子どもたちがピンで止める」というものであるが、独創的なのは、暗くした窓から一すじの光線が入る位置の床に、水で虹を描いたことであろう。床に水で虹を描くという展開をみせるに至って、「虹づくり」はすっかり

恩物ないしは製作とは離れて（しかし、宇宙の統一を知るといふ面ではより本来の恩物へと戻って）、生き生きとしたものになっている。

そして続いて紹介されているのが、先に挙げた「光の小鳥」なのである。彼女は「光の小鳥」をした後、「魔法のガラス」を子どもたちにさわらせて現象を確かめさせている。子どもたち一人ひとりが、水と定規を使って屈折の効果を試してみる。そして黒板にカラーチョークでプリズムを通る光線を描くという作業が加えられている。ここに見られるような経験を通じた学習は、後の教育の基本的な考えであるが、それがカリキュラム化される以前に、すでにこのように実践されていることは興味深い。

この記録が書かれた一八九六年は、スタンレー・ホールが幼稚園教育における新旧の流れを背景に、新しい教育理論を組み立てる基礎資料を得るため、子どもの発達に関するアンケートを全米の幼児教育関係者に配布した年である。I K U (International Kindergarten Union・

万国幼稚園連盟 年報にはそれに対する反応が報告されているが、サンフランシスコからは次のような文が寄せられている。<sup>(註5)</sup>

「当地での児童研究は流行の域を脱し、真剣に取り組まれるものとなっています」「これらの方法は、学生たちがフレイベルの原理を生き生きと把握し、また、彼の方法を機械的に用いるのを避けるのに大いに効果があるように思われます」――。

これらのことを考えると、カリフォルニアのこの幼稚園の輪郭がかなりはっきりと見えてくる。それは、受け売りの理論を黙々と実行に移すのではなく、新しい風にも窓を開けつつ、現実の子どもに対応して変化する流動的な保育である。決して、保守主義と呼ばれるような保育ではない。そして、太平洋を隔てて、時を同じくして「光の小鳥」を展開したミセス・タッピングの保育にもまた、同様のことが言えるのではないかと、私は思うのである。

### J K U 創立当時の保育者たち

ミセス・タッピングの日本での最初の仕事は、近隣の外国人に頼まれて自宅を開放し、彼らの子どもたちの保育をしたことであつた。<sup>(註6)</sup> まもなく彼女を手伝うために、ブテスト・ミッシェンから二人の若い婦人がやってきて、彼女のもとで二年間保育を学んだ。そのうちの一人ミス・ファイクは四谷彰栄幼稚園（現彰栄幼稚園）を始め、もう一人は、ミセス・タッピングが彼女の「英語による幼稚園」を「日本人のための幼稚園」に転換した時に、その責任者となつた。この人は後に初代副会長、次年度の会長となつたミス・ロールマンである。彼女は、ミセス・タッピングの幼稚園を引き継いだ後、休暇をとって帰国し、ニューヨーク州オルバニー州立師範学校の幼稚園教師養成所で学び、一九〇五年に卒業している。I K U 結成後のアメリカで大いに刺激を受けたことである。再来日後、早速、ミス・ハウと共に在日外国人宣教師たちに働きかけて、J K U 結成へのかじ取りをした<sup>(註7)</sup>ことがうかがわれる。J K U の創立集会は、ミス・ロー

ルマン再来日の翌年、一九〇六年のことであった。

このミス・ロールマンと、よく知られているJKU初代会長ミス・ハウ、会計ミス・クックらのことを考え併せると、JKUの指導者たちによって日本に入ってきたのは、巷間に批判されるような「硬直したフレーベル主義保育」ではなかったと判断できる。また、伝道一本やりの宣教師の集まりでもなかった。JKUの指導者たちは、専門の教育を受け、生きた幼児の教育に意欲を持つ保育者たちだったのである。JKUは、そこから出発した。

#### おわりに

「光の小鳥」をつかまえようとして、私は少し跳びはねた推論を展開したかもしれない。けれども、保育史にリズムの光を当てること、それはぜひとも必要なことである。一つの方角からの平板な像ではなく、変化球であってもかまわない。七色の光を当てるのが、今、歴史を掘り起こす方法なのだと思う。そこに、生き生きとし

た光の像が結ばれる。

(立教女学院短期大学  
附属愛児研究所天使園)

#### 註

- 1 JKU規約第2条 復刻版7巻11頁
- 2 小林恵子「婦人宣教師の幼児保育への貢献」 復刻版7巻405頁
- 3 Helen Joslin Lebeuf: *Homely But Happy Kindergarten Ways*. Kindergarten Magazine Vol. IX-No. 2, Oct. 1896.
- 4 First Annual Report of the Japan kindergarten Union.
- 5 Report of Second Annual Meeting of the International Kindergarten Union. 1897.
- 6 First Annual Report. p. 15.
- 7 Tenth Annual Report. p. 3.